今日のイラスト 360　「 イラストでたどる萩往還⑮ 佐々並宿」　　古谷眞之助

イラストでたどる萩往還 15　佐々並宿

文・イラスト＝古谷眞之助

佐々並にある藩主の宿泊場所「御茶屋」跡や一里塚を過ぎた所に、街並みを見下ろすのにちょうど良い高台がある。イラストはそこからの眺めを描いたもの。萩往還から少し外れているが、ガイドの際、時間が許せば必ず立ち寄ることにしている。

目につくのは屋根の瓦の色だろう。石見の国で生産されている石州瓦と呼ばれるもので、特に雪深い所で多く用いられているという。東京からの方は決まって「屋根が赤いですね」と言われる。私には決して赤くは見えず、茶色と思うのだが、敢えて異議は唱えない。手前の広い場所は脇本陣とも言うべき「御客屋」があった所で、こちらには上級武士が宿泊していた。

佐々並の街並の東側に、高さ 20m ほどの小高い丘がある。萩往還からは少し離れているが、ここに立つと佐々並宿が一望できるので、ガイドの時には時間が許せばご案内することにしている。ご覧のように石州瓦の印象的な街並みが見下ろせ、越えて来た千持峠を振り返ることもできる。石州瓦とは隣県・島根県石見国で作られる瓦で、その茶色の色に特徴があるのだが（ 現在では茶色以外がむしろ主流のようだ ）、何故かウォークに参加の皆さんはそろって「赤い」と言われる。この瓦は特に寒さに強く、山陰地方や北海道でも使用されている由。「表面はツルツルで、屋根の雪が滑り落ちやすいという長所もあります」と長らく説明してきたが、調べて見ると、寒さや風雨に強いとは説明してあっても、雪が滑り落ちやすいとはどこにも出て来ない。実は下関の生家も石州瓦なので、もしかすると親父が適当な説明したものを鵜呑みにして、そのまま信じ込んだのかもしれない。ガイドとして失格、これまで説明してきた皆さんには、ひたすらゴメンナサイと謝るしかない。

佐々並の名物は「佐々並豆腐」が一押し、と言っても異論をはさむ人はいないだろう。伊藤博文がこの豆腐の大ファンで、功成り名を遂げてから、これを作っていた土山家の主人に「東京に出て来ないか、面倒を見るから」と言って誘ったらしい。これに主人答えて曰く「この豆腐は佐々並の大豆と水があればこその味、東京では出せません」。これにはさすがの博文も諦めるしかなかったと伝えられている。蓋し見事な職人気質。その後、土山家は或る事情があって止む無く豆腐作りを廃業したため、今では隣の老舗旅館「はやし屋」の女将さんが製法を引き継ぎ、予約客にのみ提供されている。是非ご賞味あれ。

小写真は前回紹介した「おもてなし茶屋」の二階からの眺め。右手が土山家、その奥が旅館「はやし屋」である。この雰囲気からもお分かりいただけると思うが、古い町並みが保存されている佐々並の街一帯は、2011 年 6 月 20 日、文化庁によって「伝統的建築物群保存地区」に指定されている。（ 2020.6.25 記 ）